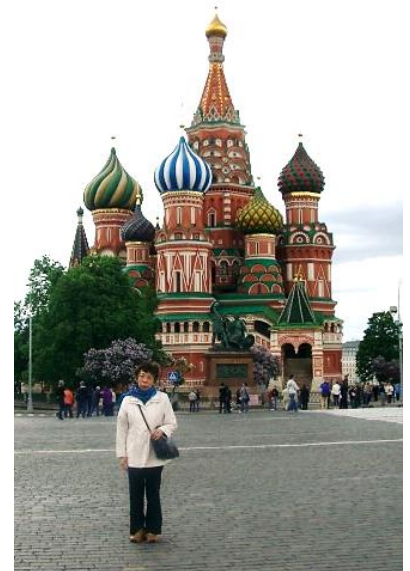


## ロシアのウクライナ侵攻を悲しむ

2022. 3. 6.

寒そうにモスクワの赤の広場の南東端にある聖ワシリイ大聖堂の前に立つのは 10 数年前の私です。その頃、私は関東学院大学学生支援室で英語を教えていました。同僚の福住誠先生から御著書『恐るべき女帝たち』を頂き、ピョートル大帝の妻エカテリーナ I から、エカテリーナ II まで、数名の女帝の権力を振るう姿にはただただ、驚くばかりでした。福住先生から多くを教えて頂き、それ以来、遙か遠い国であったロシアに少し関心を持つようになりました。



「ロシアの世界遺産を巡るツアー」があり、エルミタージュ美術館 6 時間見学というプログラムがついていましたので、さっそく友人と 5 月の連休に恐る恐る出かけた時の記念の 1 枚です。

この旅で私が最も心躍ったのは、エルミタージュ美術館でした。ロシアには不思議な魅力があり、人々は優しくかったです。ロシアの歴史や、人々の姿に生で触れることができたのは幸いでした。ロシアが世界史に登場したのは、11 世紀、キエフのウラジーミル大帝がビザンティン帝国の後継者となり、キリスト教国となった時以来です。モスクワ大公国へと成長し、モスクワ近郊の「黄金の輪」とされるセルギエル・ポサード、スズダリ等には、その当時の歴史、ロシア正教の源流を示すものが残されていました。封建国家、農奴というような言葉がまだ、生々しく感じられる風土がありました。

さて、その後フクシマ原発事故が起こり、放射能被害に苦しむロシア人の姿をオーラル・ヒストリーという手法で表現したウクライナ生まれ、ベラルーシ在住のロシア人スベトラーナ・アレクシェーヴィッチ氏の「チェルノブイリの祈り」を読む機会がありました。その時に感想(黒字)を記しました。

彼ら(ロシア人)は熱く人を愛し、愛する情熱に熱中できる人々でした。信仰が生活と表裏一体となり、神や、死んだ祖先への敬愛が常に生活を支配しています。また、命を育んできた大地へ信頼は揺るがないものでした。小話やウオッカで、笑ってしのぐユーモア、たくましさがあります。けれども、帝政ロシア、ソヴィエトという政治体制の中で、「恐怖と偏見」を叩きこまれてきました。「無知と閉鎖性」が国民性だと述べている人もいます。命令に従って生きてきた人々だったということもよく分かりました。



2月 24 日、ロシアのプーチン大統領がウクライナに侵攻しました。ロシア、ウクライナ、ベラルーシの三国は東スラブ系の同族で、歴史を共有してきましたが、現在は夫々主権国家です。それを襲ったのです。国際法では国際関係における武力の威嚇と行使の禁止の原則(第一原則)により許されることではありません。戦前の日本は、国体の護持という臣民教育、治安維持法による言論統制、大本営発表の嘘で、多くの命を奪い、失いました。ロシアが今同じ道を進んでいるように思えてなりません。

夫は 9 条の会の月例スタンディングで、「NO WAR」「ストップ プーチン」のプラカードを首に下げて、「平和憲法を守ろう！ロシアは戦争を止めよ！」と訴えました。